

桃太郎噺その前後

山崎正之

桃太郎という男、その後、どんな人生を送ったのだろうか——はななだ唐突な話で恐縮であるが、時々そんなことを考えたりする。

それというのも、いわゆるお伽噺の桃太郎の、桃から生まれる異常誕生にはじまって、猿・雉・犬を供に連れ鬼ヶ島に乗りこみ、非道な鬼どもを退治し、たくさんの戦利品を持ち帰ったという、まことに影の無い経過だけに、主人公像の焦点がどうにもしぼりきれないのである。

どだいお伽噺なる実態もつかめておらず、ほとんど童話と同義語に用いてはいるものの、さてそれがまったくイコールであるかどうか問題がないわけではないのだ。

たとえば、手許にある広辞苑（第一版）によると「御伽噺①伽の折に人のつれづれを慰めるために語り合う話 ②子供に聞かせる童話。桃太郎・かちかち山の類」のごとく記す。この「噺」なる文字は国字、「説話・童話・落語・物語」（大漢和辞典）、「はなし語る」こと。故に口扁。新を書くは話には新奇を喜ぶ故ならん」（大字典）といい明らかにか口づたえを基本とした内容を指す。今日一般には「話」もほとんど同様にもちているが、口承性の濃いもの、そしてわが国固有の伝承に属するケースを呼ぶ場合「噺」字を生かしたい思いである。

ところで、問題は「御伽噺」の意味における①と②のかかわりあいである。それも

そもトギとは何なのか。伽という字は梵語五十字母の一つでカまたガの音をあらわす。従って、この文字自体から原義は出て来そうにない。

再び広辞苑をみると「とぎ——①夜のつれづれなどに、そばにいて話の相手をする。こと。また、その人②寝所に侍ること。また、その人。③看病することまた、その人。④伽衆の略」。いかなる事態の動向があつてこのような状況と、トギという言葉との結びつきができたのか、わかつていない。ただ、あげられているいづれの事柄も、直接に子供一筋につながつて来る要素としては弱い、とはいえるだろう。

子供と切り離してみた場合、共通する主要なポイントには「夜」に関連するということだと思われる。現在と異なり、古くさかのぼればのぼるほど、夜の時間帯は特別な様相・特別な意味あいを持っていたようだ。それは祭祀饗礼の多くが夜であるとの一点にしぼつたところからでも、昼間の労働生活とはまったく違つた非日常的な場、神々をはじめ魍魎魍魎（ちみもうりょう）の跋扈（ばっこ）するおそろしい暗黒の世

界であつた。

やがて祭りの場は次第に固定化して行き、自分たちの氏族を主体に置いたデモンストレーションにも似た傾向をうかがわせるようになる。氏祖伝承を語り継ぐことこそ、この場のもっとも重要な行事のひとつとして考えてよからう。ここで桃太郎の話が、氏祖伝承のなかのものであつたと推し測るのは飛躍に過ぎるであらうか。

かつて柳田国男が『桃太郎の誕生』で提示してみせた、財宝を持ち帰ったことを手段によき妻、よき家、よき児を得、永く栄えるという過程はこの際だじな因子といわなければならない。なぜなら、永く栄えると伝える場面は、よき児が名族の祖と語られる場面といつたいどれほどの距離を認めたらよいのか、おおよそ見当のつくはずのものだらう。

むろん、桃太郎一族がどのような氏族としての存在だったのかは、何の手がかりもない話ではあるけれど、そうだからといって一蹴しきれないにかをそこに見出そうとするのは、けつしてあなたがちな態度ではないと考える。

そこで次の段階に進展させると、同じく

柳田国男の、子供に聞かせる話ということから結婚に関する部分を省いた、とする指摘が、やはり有効に働こう。時代が律令体制を整える歩調に合わせ、おのれの一族の優位性を内外に誇示しようがために語つた氏祖伝承の意味も、次第に色褪せていってであろうことは十分に想像のつくところである。更には、そうした分野をめぐる範疇だけ、夜の聖性というか祭祀的迫力を喪失して行くのだ。記紀や風土記の類で明白に知られているように、大手の氏祖は神統譜と共にあり、大手ならずとも氏祖たる者は神もしくは神に准ずる怪異・超人的能力の持主であつて初めてその位置にあり得た、というならば聖性の喪失はそのまま伝奇物語へ降下したとみて少しもおかしくない。

短絡気味であることを承知してつづけてみると、子供たちの寝る前ひととき、祖父母や親などから語り聞かされたであろう昔話の大概は、以上のようなプロセスを経た成り立ちを負つてはいなかったか。「御伽噺」とは、かくして名づけられた呼称だ

つた——。

桃太郎のその後は、案外俗っぽく型通りのストーリーで終わっていたかも知れないと思う。いまからではそういう見方・言い方しか出来ないのも、伝承の本流というものがもともと型を継承・維持することで生き残つて来たからである。

所詮、御伽噺の桃太郎は型通りの枠の中から抜け出すわけにはいかないのならば、せめて人間的な陰翳を与えて、少しでもわれわれの、いや子供たちの身近な人物にしたててやりたいではないか。そうなると、是非思ひおこして欲しいものに、太宰治の「お伽草子」がある。「小さい時から泣蟲で、からだ弱くて、はにかみ屋で、さつぱり駄目な男だつた」——そんな桃太郎が成長して一人前以上の仕事をなしたとげた、というのだ。これで勇気を得ない子供があらうだらうか。

もう一筆つけ加えるなら、桃太郎噺はことき「童話」になるのである。